

## 漢晉間における車制の變容

岡村秀典

殷後期にユーラシアの西方から馬二頭立て單轅車がもたらされ、西周時代には馬四頭立て戦車が出現して機動力が増し、軍事の中核を擔うようになった。戦國時代に戦車は騎兵の登場によって次第に衰退していったが、中國を統一した秦漢帝國が官僚制にもとづく中央集權体制を整え、全國に道路網を整備した結果、戦車に代わって馬一頭立て雙轅車（「輶車」という二人乗り小型車）が官僚たちのステイタスシンボルとして普及した。また、皇帝や王侯・功臣の乗る馬四頭立て「安車」が出現した。

『續漢書』輿服志上によると、皇帝の車騎行列は「屬車八十一乘、千乘・萬騎を備える」といい、百官には官秩に應じた車騎行列に関する規定が記されている。後漢墓の壁畫や畫像石に描かれた車騎行列圖は、輿服志の規定に必ずしも合致していないが、内蒙古和林格爾壁畫墓では、墓主が「舉孝廉時」から「使持節護烏桓校尉」に榮達するまで各段階の官位に合わせた車騎行列を描き分けている。

しかし、後漢後期に質素な運搬用の牛車に乗る士大夫が現れ、魏晉期にはそれが美德とされるようになり、『晉書』輿服志には王公貴族の乗る牛車の規定が記されている。そのひとつ「雲母車（雲母で飾った牛車）」は漢代の女性用の「輶車（四周を遮蔽した馬車）」を牛車に變えたもので、その名は洛陽西朱村一号曹魏墓から出土した石牌にもみえる。また、牛車の上に日除けの幕を懸けた「通幃車」は、219年に曹操が楊彪に贈った品の中にその名がみえ、357年の北朝鮮安岳三号高句麗墓では、（晉の）平東將軍の冬壽が倚子形の牛車に乗り、勇壯な儀仗隊列を率いている様子が壁畫に描かれている。

このように魏晉の貴族たちは、輕快な車馬を棄てて遲鈍な牛車に乗りかえた。この車制は隋唐時代まで繼承され、9世紀には日本の平安貴族に受容される。わが國風文化を代表する牛車は、600年前の魏晉期に淵源をもつのである。